

# 島津義弘の茶の湯と茶陶製作

深 港 恭 子

## はじめに

薩摩焼においては、島津義弘が朝鮮陶工の金海に命じて茶陶を製作しており、中でも「薩摩肩衝」の名で知られる茶入が、当時の茶の湯のリーダーであった古田織部の評価を受けて、中央政権の重臣や数寄者たちに広く受け入れられた。

薩摩焼の茶陶製作についての研究は、主なものに窯跡からの出土品をもとにした関一之<sup>(1)</sup>や島津家文書や茶会記をもとにした上原兼善<sup>(2)</sup>、薩摩茶入の伝世品をテーマにした松村真希子<sup>(3)</sup>の研究がある。筆者はこれらの研究成果を踏まえ、平成 26 (2014) 年に「大名茶の時代—薩摩と九州山口の茶陶」という展覧会を企画したが<sup>(4)</sup>、産地(窯)や製作年代、歴史的背景も含めて課題は多かった。これらの課題は今なお当時のまま残されている。そこで本稿では、島津家文書と茶会記を主な素材として、義弘をはじめとした島津氏における茶の湯と周辺の人々の動向について整理を行うことにより、義弘が行った茶陶製作の展開を明らかにしたい。

## 1 島津義弘と茶の湯

薩摩では戦国期から当主の島津義久や弟の義弘、重臣らを中心に茶の湯が受容されている。戦国武将にとって、文は武を助けるものであり、文武両道を兼備してこそ真の武士と認識されており<sup>(5)</sup>、文芸を習得することが嗜みであった。島津義久の家老上井覚兼(1545～89)が記した「伊勢守心得書」<sup>(6)</sup>に、「藝能之事、(中略)一事を勝て候ても、万事にわたらざるにハ劣へくや思ひ侍りき」とあり、薩摩においても同様に認識されていたことがうかがえる。

「上井覚兼日記」<sup>(7)</sup>には、天正 11 (1583) 年 11 月 19 日条に「忠棟御宿にて碁・将碁にて慰候、従夫茶湯之座二而、各たてのきに稽故共申候、左候処に、珠長被来候、明日之連哥一順共仕候也」とあり、碁と将碁の後に茶の湯の稽古、さらに連歌にいそしむ様子が記されている。戦乱の世にあって、芸能が娯楽として日常の一部になっているようである。茶

の湯もその一つであった。

また、宇治の人が薩摩に来訪して義久へ茶を進上し、覚兼が同人に自身の茶道具を見せるなど、茶の湯を通じた京との交流や茶道具蒐集も行われていた。さらに上洛した内衆の四本大学助が堺で茶会に出席し、その様子を薩摩において茶会を開き伝授している<sup>(8)</sup>。

このように、薩摩では戦国期から京都や堺と結びついた茶の湯が根づいていた。

織豊期には政権運営のなかで茶の湯が重んじられたことから権威化が進み、茶道具はその象徴として取り扱われ羨望の的となった。その指導者となった千利休が完成させた侘び茶は、武将の新たな素養の一つとして広がっていく。薩摩においては、天正 15 年 5 月 8 日、島津義久が川内の泰平寺で豊臣秀吉に降伏し、義久・義弘が九州平定の講和の場に巧みに組み込まれていた茶の湯を通じて本格的に侘び茶と出会うことになったと推測される。

(表 1) は九州平定後、島津氏が出席した茶会をまとめたものである。降伏直後の 6 月 26 日、上洛の途上にあつた義久に対し、博多陣中への参上をうながした秀吉は茶会を催している。利休と並ぶ宗匠の一人、津田宗及が出迎え、秀吉自ら茶を点てて義久にすすめ、茶道具には唐物茶入の白眉といわれる初花肩衝、高麗茶碗の最高峰とされた井戸茶碗を用いている<sup>(9)</sup>。翌年上洛した義弘も、大坂城山里で秀吉の茶会に招かれており、千利休のお点前で茶がふるまわれ、茶道具で飾られた書院を見た義弘は「結構きれいな事難延短筆候」<sup>(10)</sup>と圧倒されるのである。

こうした破格のもてなしは、天正 15 年正月に秀吉が博多の豪商神屋宗湛を大坂城の茶会に招き、別格の厚遇を与えた<sup>(11)</sup>のに似る。この時の演出には秀吉の中に島津討伐への意識と朝鮮出兵の計画があつたとされており<sup>(12)</sup>、義久・義弘の場合も政治的配慮が意識されていたと推測される。茶の湯は、九州平定前とは異なり、外交に必須の場となっていた。

## 2 千利休と島津義弘

九州平定後に秀吉やその重臣らとの間でたびたび行われた茶会（表1）には常に政治的な意識が伴っていたと思われるが、義弘にとってみれば、師と仰ぐことになる千利休と出会い、本格的な侘び茶の経験の場となったわけで、茶人島津義弘への第一歩がここから始まったと言えよう。

信長の茶の湯の指南役として頭角を現した利休は、天正13（1585）年に、秀吉が関白就任の返礼で正親町天皇に茶を献じた禁裏茶会に茶堂として出仕し、天皇から「利休」の号を賜った。義弘が出会ったのは、利休が名実ともに天下一の茶人としての立場を確立した時期だったと言える。

この後、義弘は利休の弟子となる<sup>(13)</sup>。その時期は

不明であるが、熱心ぶりは、義弘が利休に対して茶の湯の作法について質問を書き連ね指導を仰いだのに対し、利休がひとつひとつ回答した「惟新様より利休江御尋之條書」<sup>(14)</sup>からうかがうことができる。弟子とはいえ、面会の機会は多くなかったと考えられ、50項目にわたって作法の一举一動について尋ねている内容は、それを裏付けるものと言える。また一方で、義弘が作法を深く理解していたことを示しており、「我々茶之湯不執心にて、口外勿躰なく存、見聞タル計候」（慶長3年）<sup>(15)</sup>と記した義久とは随分違いがある。義弘の茶の湯への愛好は九州平定前からのもので、薩摩における茶の湯の実践が下地としてあったと考えてよいのではなかろうか。

（表1）島津氏が出席した茶会

年記	席主・場所など	参加者	道具など	出典
天正15年6月26日	豊臣秀吉(津田宗及)[博多陣中]	島津義久 伊集院忠棟	初花肩衝 高麗茶碗(井戸)	後編二 354/410
天正15年10月21日	豊臣秀吉[大坂城山里]	細川幽齋 伊集院忠棟		宗湛日記
天正16年(1~6月頃)	豊臣秀吉(津田宗及・島津忠長)[聚楽茶亭]	細川幽齋 島津義久		後編二 464
天正16年6月6日	豊臣秀吉(津田宗及・細川幽齋・千利休)[大坂城山里]	島津義弘 伊集院忠棟	白天目 備前水指 磨手茶碗他	後編二 471
天正16年9月8日	島津義久(島津義弘)[大阪御宿]	細川幽齋 石田三成		後編二 510/515
天正16年9月11日	豊臣秀吉	島津義久		後編二 510
天正18年9月14日	島津義久	祐乘法印	(口切)	後編二 692
天正18年9月22日	島津義久	細川幽齋 後藤徳乗	* 島津義久が座主である可能性が高いがはっきりしない。	後編二 693
天正18年10月8日	島津義久(島井宗叱)[茶室]	島津義弘		後編二 695
天正18年11月晦日	島津義久	石田三成 島津義弘		後編二 706
(天正19年)閏正月11日	千利休(津田宗及・島津忠長)	島津義弘 天野屋宗也		利休百会記
文禄3年9月14日	島津家久[名護屋城島津陣地]	寺沢広高		後編二 1440
文禄3年9月15日	島津家久[名護屋城島津陣地]	新納旅庵 伊勢弥九郎 鎌田次右衛門		後編二 1440
文禄3年9月19日	島津家久[名護屋城島津陣]	今喜(医者)		後編二 1440
文禄3年10月3日	島津家久[名護屋城島津陣]	伊勢弥九郎 鎌雲州		後編二 1440
文禄3年11月3日	島津義弘[高麗唐島義弘本陣]	島津家久		後編二 1440
文禄3年11月16日	島津義弘[高麗唐島義弘本陣]	島津家久		後編二 1440
文禄3年12月6日	島津家久[高麗唐島家久陣]	島津忠長		後編二 1440
文禄3年12月13日	島津家久[高麗唐島家久陣]	松井五郎兵衛		後編二 1440
文禄3年12月22日	島津家久[高麗唐島家久陣]	松井五郎兵衛		後編二 1440
文禄3年12月27日	島津家久[高麗唐島家久陣]	島津義弘(数寄屋の完成祝)		後編二 1440
文禄3年12月28日	島津家久[高麗唐島家久陣]	島津義弘 島津忠長		後編二 1440
文禄3年12月29日	島津家久[高麗唐島家久陣]	伊勢弥九郎 比志嶋紀伊守		後編二 1440
文禄4年12月4日	島津家久[高麗唐島家久陣]	瀧七右衛門		後編二 1643
文禄4年12月17日	島津家久[高麗唐島家久陣]	伊勢弥九郎 新納五郎右衛門		後編二 1643
文禄4年12月18日	島津家久[高麗唐島家久陣]	比志嶋紀伊守 伊勢弥九郎		後編二 1643
文禄4年12月20日	島津家久[高麗唐島家久陣]	源七郎 比志嶋紀伊守		後編二 1440
慶長4年1月7日	徳川家康	立花宗茂 小早川秀包 高橋直次 筑紫広門 島津家久		後編三 646/647
慶長4年2月12日	石田三成[大坂城]	島津義弘・家久(薩摩島津殿親子兩人) 神屋宗湛		宗湛日記
慶長10年5月14日	古田織部	島津家久	勢高茶入 瀬戸茶碗 伊賀水指	後編四 57
慶長10年5月19日	徳川秀忠	島津家久	名器・名画で飾られる	後編四 60~62
慶長19年1月19日	島津義弘(三原諸右衛門 国分但馬守)	東郷長門守		後編四 1086
寛永6年2月28日	島津家久カ	永井信濃守 渡辺凶書頭		後編五 212

\* 島津家久については、島津忠恒・島津又八郎と表記があるものもすべて島津家久で統一した。

\* 出典については、「後編」は『鹿兒島県史料 旧記雑録後編』を示す。「宗湛日記」は、芳賀幸四郎校訂「宗湛日記」(千宗室総編集『茶道古典全集』第6巻 淡交社発行)所収、「利休百会記」は、宋宗廣校訂「利休百会記」(千宗室総編集『茶道古典全集』第6巻 淡交社発行)所収

「利休百会記」によれば、天正 19 年と推定される閏 1 月 11 日、義弘は天野屋宗也とともに利休の茶会に招かれている。本書の内容には議論があるが<sup>(16)</sup>、ひとまず義弘と宗也という弟子を招いての茶会であったとしておく。それからわずか一ヶ月後の 2 月 28 日、利休は自害することとなり、義弘が弟子であった期間は、長く見積もっても 3 年に満たなかった。

### 3 朝鮮半島での茶の湯

利休の自害から約半年後の天正 19 (1591) 年 9 月、秀吉が朝鮮半島への出兵を発令し、義弘は軍を率いて翌年 4 月に渡海している。この頃の義弘は豊臣政権に対して国持大名としての体裁を整えることができず、国元との調整でも苦境に立たされているが、そこには触れず論を進めたい。

義弘は、朝鮮在陣中常に鶴首の茶人を携行し、折々に茶を愉しんだという<sup>(17)</sup>。義弘とともに参陣していた次男島津久保の病没により渡海することとなった三男忠恒は、名護屋の陣地に着くと直ちに茶の湯座敷を造作し<sup>(18)</sup>、渡海した巨済島でもすぐに数寄屋の造作にとりかかっている<sup>(19)</sup>。

(表 1) では、義弘と忠恒の陣地で茶会が頻繁に催されている様子が見え、日本から茶も補給されている。文禄 3 (1594) 年には、小西行長が帰国する折に義弘が茶壺を預け、それを受け取った石田三成が新茶を詰めて送り返した。受け取った義弘は、「誠々長陣之窮屈を散し可申迄二候」と、茶の湯が長陣の窮屈を癒やしてくれるとし、来年もまた茶話をお願いしたいと告げている<sup>(20)</sup>。また、島津領の太閤検地処理のために一時帰国した義弘は、在陣する忠恒に数種類の茶を送っているし<sup>(21)</sup>、慶長 3 (1598) 年 5 月には上洛していた義久が、流行りの今焼の茶碗や棗などを忠恒に届けている<sup>(22)</sup>。

秀吉が茶の湯に懸命なため、大名たちもそれに倣ったという事情があったとはいえ、茶人でもあった義弘のみならず、朝鮮の島津陣内で繰り返し催される茶の湯の様子や、忠恒や義久とのやりとりは、九州平定以前を彷彿とさせる。

そして、秀吉の死によって朝鮮半島から退却することになった慶長 3 年、大名らは陶工らを連れ帰り、それぞれの領国に窯業という新たな産業を生み出していく。薩摩においては 70 名余りの男女が渡来し、薩摩焼が誕生する。

### 4 島津義弘による茶陶製作

織豊政権の茶の湯を重んじる姿勢は徳川政権にも引き継がれ、茶の湯は大名間の外交に利用された。そのため薩摩に限らず、朝鮮陶工によって陶磁器生産がはじまった各藩で茶陶がつくられている。

薩摩焼における初期の推進者は義弘自身であり、プロデューサーの役割を果たしながら茶陶を製作している。その最初の窯が、帖佐にあった義弘の居館近くに、金海に命じて築かせた宇都窯である。その後、加治木に居館を移すと、金海もそれに従い御里窯を築く。この 2 つの窯が、茶陶製作の場であった。

義弘が茶陶の製作に直接的に関与することになった背景には、関ヶ原の戦いでの敗走があったと考えられる。その敗走劇は「島津の退き口」として知られるが、薩摩に帰着して以降、幕府との正式なやりとりは取次役の山口直友らと島津義久、忠恒の間で行われることとなった。つまり、義弘は公式の外交の場からは外れたのであり、これ以降一度も上洛することはなかった。このことが、義弘が茶陶製作の現場に深く関わることになった要因と言えよう。

とはいえ、山口直友や本多正純など徳川政権の重臣らと義弘との間では頻繁な書状のやり取りがあり、茶陶の送付に関する内容が含まれるものを、寛永 14 (1637) 年までの間に 36 件確認できる。それをまとめたのが(表 2)で、書状の時期を稼働していた窯ごとに区切っている。宇都窯の操業期間に 11 件、御里窯の期間に 16 件、それ以降に 9 件の書状がある。

茶陶の表記の中で圧倒的に多く目につくのが「かたつき」・「肩衝」という表記である。肩衝とは肩の張った茶入のことで、義弘が関わった宇都窯・御里窯の主体を成しており、元和 5 (1619) 年に義弘が亡くなり御里窯が閉窯するのを境に、「茶碗」・「灰入」・「底取」・「ほうろく」へと変化している。次に、(表 2)に基づいて、義弘が関わった宇都窯と御里窯の展開について考察する。

#### (1) 宇都窯の展開

義弘は文禄 4 (1595) 年 12 月に栗野から帖佐に移り、慶長 11 (1606) 年まで暮らした。関ヶ原の戦いから敗走した義弘は、慶長 5 年 10 月に帰着するが、これが朝鮮出兵以来、初の帰館であった。その後、謹慎の意を示すために翌 6 年 4 月初めに桜島に蟄居、6 月頃に許され居館に戻っている。宇都窯は居館から約 100 メートルの場所に築かれており、藩が本格的に薩摩焼の育成に着手するのは、関ヶ原

(表2) 書状から見る薩摩茶陶をめぐる交流と受納者

窯	期日	差出	宛所	薩摩茶陶の表記・内容など	受納(◎)・受納予定(○)・受納不明(△)など	出典
宇都窯	(慶長7年)3月2日付	島津義弘	山口直友	「かたつき」送付 * 切り型(型見本)をもとに製作	山口直友◎	後編三 1610
	慶長8年2月7日付	昭高院准后如雪	島津家久	「葉茶壺」受納の御礼 * 薩摩焼かほつきりしない	昭高院准后如雪◎	後編三 1785
	慶長9年12月1日付	山口直友	島津義弘	「茶入」受納 * 古田織部が出来栄えを評価。諸衆が入手を望む	山口直友◎	後編三 1966
	慶長10年1月10日付	島津義弘	榊山久高	「かたつき」依頼 * 山口直友から止められており送れない	伊勢平左衛門貞成△ * ただし、以前にも送られている	後編四 6
	慶長10年2月13日付	山口直友	島津義弘	「かたつき」依頼 * 徳川秀忠への披露目的	古田織部◎ 不明◎ * 12/1 書状にある茶入だろう	後編四 10
	慶長10年2月20日付	福島正則	島津家久	「茶入拾計」依頼	福島正則△	後編四 12
	慶長10年4月27日付	伊藤則長	島津家久	「薩摩焼のかたつき」受納の御礼 * 道与宛のかたつき	今井道与◎	後編四 49
	慶長10年9月15日付	本多正純	島津義弘	「焼物 蘭鉢」到着の報告、義弘依頼の人々に届ける * 本多にはこれ以前にも送られている * 千利休の後継者少庵にも送られた可能性がある	太田宗善◎ 上田覚甫◎ 諱齋◎ 宗圓◎ 有閑◎ 津田秀政◎ 守拍◎ 山口直友◎ 宗可◎	後編四 106
	慶長11年4月14日	島津義弘	島津家久	「茶わん 肩衝」依頼に対し、でき次第送付	島津家久○	後編四 190
	慶長11年5月1日	島津義弘	島津家久	「かたつき 肩衝六ツ」送付 * 福島正則へも届けてほしい	福島正則○	後編四 204
	慶長12年5月27日付	福島正則	島津家久	「御国之花入 五ツ」依頼 * 受納した肩衝(5/1 書状分)はすべて他に取られた	福島正則◎	後編四 358
	御里窯	慶長17年5月10日付	義弘御使 伊勢兵部少輔	本多正信	「当国焼のかたつき二ツ」送付	本多正信◎
慶長17年5月10日付		義弘御使 伊勢兵部少輔	本多正純	「かたつき三 水さしー 当国焼」送付	本多正純◎	後編四 897
慶長17年5月10日付		義弘御使 伊勢兵部少輔	山口直友	「かたつき二」送付	山口直友◎	後編四 898
慶長17年5月10日付		義弘御使 伊勢兵部少輔	立花宗茂	「当国焼のかたつき壺」送付	立花宗茂◎	後編四 899
慶長17年7月25日付		義弘御使 伊勢兵部少輔	太田宗善(一吉)	「肩衝」織部受納に満足 「肩衝四」配付依頼 「(焼立分替)肩衝一」評価依頼	古田織部◎ 諱齋◎ 徳乗◎	後編四 915
慶長17年7月25日付		義弘御使 伊勢兵部少輔	正因	「此元焼 肩衝一 葉茶壺一 水指一」送付	正因◎	後編四 917
慶長17年10月11日付		山口直友	島津義弘	「肩衝十一」返却の報告 * 古田織部が受け取るも全て返却		後編四 960
慶長17年後10月3日付		島津義弘	山口直友	「かたつき三ツ」送付	山口直友◎	後編四 970
慶長17年後10月3日付		島津義弘	太田宗善(一吉)	「かたつき七ツ」送付	宗善◎	後編四 971
慶長17年11月22日付		古田織部	島津義弘	「肩衝二ツ」の評価と指導 * 1個を受納、1個は参考に返却	古田織部◎	後編四 974
慶長18年4月4日付		義弘御使 宗二	後藤徳乗	「肩衝二ツ」送付	後藤徳乗◎	後編四 1000
慶長18年9月24日付		山口直友	島津義弘	「かたつき二ツ」受納の御礼と追加の依頼 * これまでにない多くの要望	山口直友◎ * 受納したが他の者にとられた	後編四 1050
慶長19年4月30日		島津義弘	松平河内守	「肩衝二ツ 茶壺一ツ 水サシ一ツ 茶碗二ツ(万介焼一ツ 仲次焼一ツ)」送付	松平河内守◎	後編四 1086
慶長19年6月10日		島津家久	正源院	「葉茶壺一ツ(仲次焼)」を遣わす	正源院◎	後編四 1086
元和元年10月11日		島津家久	中山王	「宇治茶一壺(加治木焼)」送付	中山王◎	後編四 1312
元和3年9月3日付		米津田政(勘兵衛)	島津家久	「茶碗」受納の御礼	米津田政◎	後編四 1462
元和9年12月6日付		酒井忠世	島津家久	「茶碗十 御そことりはい入のほうろく八」家光への披露報告及び「茶碗三つ そことりはい入のほうろく四」酒井受納の御礼	徳川家光◎ 酒井忠世◎	後編四 1830
寛永3年閏4月22日付	土井利勝	島津家久	「御国焼 茶碗 灰入 底取」等の秀忠への披露報告	徳川秀忠◎	後編五 21	
寛永3年5月7日付	酒井忠世	島津家久	「焼物茶碗 灰入 底取」家光への披露報告及び酒井受納の御礼	徳川家光◎ 酒井忠世◎	後編五 25	
寛永3年9月28日付	島津家久	土井利勝	「茶碗拾 御そことりはい入のほうろく八」送付	土井利勝◎	後編五 56	
寛永6年3月21日付		島津家久	「灰入十 底取はうろく十」等の秀忠への披露報告	徳川秀忠◎	後編五 231	
寛永6年10月2日	翌年の「御教寄御成」のための御教寄屋道具		「そことりほうろく ころほうろく」 * 「但御国焼一而能御座候」とある		後編五 264	
寛永8年9月付	島津家久	中山王	「宇治茶一壺并茶入一箱二十入、茶碗一箱二十入」等の送付	中山王◎	後編五 445	
寛永8年10月28日付	島津家久	中山王	「灰入ほうろく三并大灰一箱 はんたほうろく三」送付	中山王◎	後編五 460	
寛永14年10月8日付	島津家久	琉球国王	「爰許焼之茶入茶碗」送付	琉球国王◎	後編五 1094	

※ 出典の「後編」は、『鹿児島史料 旧記録後編』を示す。

※ 茶陶を製作した窯は、島津義弘が佐佐に居住していた時期に朝鮮陶工の金海が製陶に従事した宇都窯、義弘が慶長13(1608)年頃に加治木に移住し、それに随った金海が開いた御里窯、鹿児島城近隣の堅野に置かれた藩窯(堅野冷水窯跡など)がある。藩窯の創業時期については不明な部分が多いが、ここでは元和5(1619)年に義弘が没した後に開窯したとする従来の説に基づいている。

の戦いの戦後処理が一段落した慶長7年4月以降のことと考えられていることから、宇都窯の創建もそれ以降と考えられている。しかしながら、義弘は帰館前の慶長4年に数寄屋路地への植樹を命じており<sup>(23)</sup>、また慶長7年7月には照高院准后如雪が義弘に宛てた書状に「漸涼風、定焼物可為御調合与御床敷存候」<sup>(24)</sup>とあることから、すでに焼物の製作が進んでいることがうかがえる。したがって、宇都窯は戦後処理を待たずに築窯に向けた準備がなされ、慶長7年には操業していたと考えられる。義弘の帰館後間もなく築造に向けた動きが始まったのではなかろうか。

慶長9年には、義弘から送られた茶入の出来栄えを古田織部が「焼しほ一段能御座候」と賞賛し、数寄者や在京の諸衆が入手を望む状況となっている<sup>(25)</sup>。織部は千利休の弟子で、利休の没後天下の宗匠となり、2代将軍徳川秀忠の茶堂を務めた。織部の名声は文禄・慶長の役以降高くなり、「慶長十年を過ぎるころには織部の名声はいやがうえにも高くなった」<sup>(26)</sup>という。薩摩肩衝の評判は、織部が確固たる名声を得た時期と符合している。織部の評価が呼び水となり、諸衆が入手を求めるようになったと考えられる。こうして、薩摩肩衝は製作の開始から、わずか3年ほどで名声を博すことになったのである。

また、将軍宣下のために徳川秀忠が上洛する折に、薩摩肩衝を上覧に供する計画があったことが、慶長

9年12月1日付の山口直友書状<sup>(27)</sup>からうかがえる。その直前には、京都への薩摩肩衝の持ち込みを全面的に控えるといった周到ぶりである。この計画には織部も関与していたと推測され、新たな国焼「薩摩肩衝」の登場を、将軍の上覧によってニュースにすることが目論まれたのではあるまいか。

こうしたパフォーマンスの類例を挙げると、織部は慶長8年4月、唐津焼尽くしの道具立ての茶会を催し、堺の有力商人と唐津藩主の寺沢広高を招いている。これは有力商人に対するお披露目の機会であった可能性が指摘されている<sup>(28)</sup>。薩摩肩衝の場合は贈呈であり販売は意図されていないものの、評判が上がり徳川政権に関わる人々が求める状況は、島津家にとっても歓迎すべきものであっただろう。

薩摩肩衝が秀忠に実際に披露されたかどうかは記録がないものの、将軍宣下の1ヶ月後、織部は在京中の忠恒を茶席に招き、その5日後には、秀忠が忠恒を茶席に招いている。

(表3)は、薩摩の茶陶が使用された茶会をまとめたものである。慶長10年5月25日の茶会で薩摩肩衝を用いた上田覚甫は織部の高弟で、(表2)の同年9月15日付の本多正純書状で、茶陶の送り先が上がっている。管見の範囲では、これが記録に残る薩摩焼を用いた初の茶会である。同人が9月26日に催した茶会で薩摩肩衝と取り合わせた京焼黒茶碗に「ヒツム」とある。いわゆる歪んだ形の茶碗であ

(表3) 茶会記にみる薩摩焼

年記	席主	参会者	薩摩焼	その他の道具	茶会記
慶長10年5月25日	上田覚甫	島津平佐 法順 神屋宗湛	肩衝 薩摩ヤキ	瀬戸水指 今焼碗 今焼水覆(建水) 今焼水次	宗湛日記
慶長10年9月26日	上田覚甫	大名衆 神屋宗湛	肩衝ハ、薩摩ヤキ	信楽瓢箪形水指 京焼黒茶碗(ヒツム)	宗湛日記
慶長11年10月5日	上田覚甫	小野河内 道炊 神屋宗湛	肩衝 薩摩ノ	信楽水指 京焼黒茶碗 瀬戸水覆(建水)	宗湛日記
慶長11年12月13日	取福院	古田織部 松屋久好	サツマ焼肩衝	信楽焼筒に薄色椿・白梅肥前水指	松屋会記
慶長16年9月9日	猪子内匠	竹中伊豆守 松屋久好	サツマヤキ肩衝	備前水指 高麗茶碗	松屋会記
慶長17年11月21日	上生院	吉兵衛 松屋久重	サツマヤキ肩衝	高麗茶碗	松屋会記
寛永6年11月11日	京都頂妙寺孝純	辻七右衛門 福庵 理兵衛 松屋久重	茶入サツマ	信楽焼筒に赤椿・水仙 信楽水指 *「座敷三条大、小遣ノ心」(小堀遠州の好み)とあり	松屋会記
寛永6年11月14日	京都井川実右衛門	辻七右衛門 福庵 松屋久重	長き茶入、サツマヤキ		松屋会記
寛永7年3月23日	倉鹿野五左衛門	辻七右衛門 中左京 道也 松屋久重	茶入サツマヤキ		松屋会記
寛永7年3月29日	布屋善兵衛	道也 宗以 御卜 侍従 松屋久重	茶入サツマヤキ		松屋会記
寛永12年10月20日	野田久保左	中坊飛州 和田清右衛門 中沼左京 石井宗有 松屋久重	サツマ焼茶入		松屋会記
寛永14年5月21日	京都三条唐物屋道味	辻七右衛門 榎(榎並)左衛門 守顯 松屋久重	サツマヤキ肩衝	古信楽水指 高麗茶碗(割高台)	松屋会記
寛永18年2月23日	郡山日高右衛門兵衛	中坊長兵衛(時祐) 大(大蔵)源右衛門 松屋久重	サツマ焼茶入		松屋会記

※「宗湛日記」は、芳賀幸四郎校訂「宗湛日記」(千宗室総編集『茶道古典全集』第6巻 淡交社発行)所収  
 ※「松屋会記」は、永島福太郎校訂「松屋会記」(千宗室総編集『茶道古典全集』第9巻 淡交社発行)所収

り、織部好み意識された茶会であったと推定される。織部が評価しているのが当然といえば当然だが、薩摩肩衝は織部好みの茶道具として登場したのである。このように薩摩肩衝は、宇都窯の段階から織部の評価を得て、茶会で用いられるようになっていた。

しかしながら、宇都窯跡の発掘調査では、茶入はわずか3点しか検出されていない。そのうち2点が肩衝形の底部片で、円盤状の底部に側壁を積み上げたことを示す接合痕が残る独特の製法がとられている<sup>(29)</sup>。ともあれ、(表2)からは相当数の茶入が焼成されたことと推測されるため、さらなる調査による茶入片の検出が期待される。

ところで(表2)においては、肩衝以外に、蘭鉢や茶碗が送られている。慶長10年9月15日付の書状<sup>(30)</sup>では、正純がとりわけ蘭鉢を見事な出来と評すると同時に、使者から「殊更御てつから為被入御念由」と聞き取っている。義弘はたびたび窯場を訪れていたと言われる。『白鷺洲』<sup>(31)</sup>に「惟新様御手つからこれへ押よと／＼と出来の御目利にて被仰付たる御判手葉をかけ仕舞不出来成は其場にて割捨に被仰付」とあり、好みのものに判を押して焼成し、仕上がりが悪いものは割り捨てたという。義弘が直接的に陶工等に指示しながら製作を行った様子がみとれる。

宇都窯での茶陶製作は金海によって行われたとされている。しかしながら、(表2)の慶長11年4月14日付の書状<sup>(32)</sup>では、家久からの茶碗の所望を受けて、萬介(萬助)に茶碗の製作が命じられており、「かこしまより萬介めしよせ、念比二申聞せ候、定早々出来可申候」とある。萬介は金海と同じく朝鮮陶工の田原萬助(申武信)のことと考えられ、鹿児島からわざわざ呼ばれていることから、熟練者だったと推測される。『白鷺洲』に「田原の元祖古帖佐にて候、網の手業杯別て名物にて候」とあり、古帖佐すなわち義弘の窯で作陶し、網の目のような貫入が入る茶碗の名手であったとする記述とも合致する。

これまで田原萬助は義弘が没し、金海が藩窯に移った後、金海によって雇われたと考えられてきたが、宇都窯でも製作に携わっていた。初期の宇都窯には金海と萬介が携わっていたのであり、茶入は金海、茶碗は萬介といった分業もなされていたことだろう。慶長19年にも義弘が「萬介焼」を送付していることから、御里窯に移った時点でも義弘のもとで作陶に従事していたと考えられる。

## (2) 御里窯の展開

御里窯は、慶長13(1608)年頃に義弘が加治木

に居館を移したのに伴い金海も移動し、屋敷に接する場所に築かれた。先述のとおり、萬介も随った可能性が高く、同時に宇都窯は閉窯したのである。義弘は、亡くなるまで同所に居住した。

(表2)では、慶長17年から元和3(1617)年の書状が御里窯の稼働期に当たる。詳しく触れる前に、茶陶製作に携わった金海が、5年にわたり瀬戸で修業を行ったと伝えていることについて考察したい。

「星山家譜」に「其後瀬戸焼茶入稽古可仕由 惟新公ヨリ被仰付、上方エ召登、五ヶ年罷居、罷下り御用焼物相調差上申候」<sup>(33)</sup>とあるが、修業の時期は宇都窯時代と考えられつつも不明とされている。これを前提に(表2)の送付状況を見直すと、慶長12年5月から同17年5月までの5年間、茶入の送付が行われていない。ちょうど義弘が居館を帖佐から加治木へと移す時期にあたっており、金海が修業に出たとすればこの時期に行われたと判断される。

御里窯に移って初めて確認できる肩衝茶入の送付は慶長17年5月10日付の書状において、徳川幕府と薩摩藩を繋いできた本多正信、本多正純、山口直友、立花宗茂という重臣らに対しての贈呈である。

その2ヶ月後の7月25日付で義弘が京都の太田宗善に宛てた書状<sup>(34)</sup>のうち、一条は古田織部がすでに送られていた肩衝1個を焼き立てがいいと受納したことに満足しているという内容である。二条は、織部の弟子上田道甫から歸齋と徳乗が肩衝を欲しがっているということを知ったので、肩衝を4個送るとある。三条には、「肩衝一上せ申候、是者焼立分替申候間、如何候はん哉、様子承度候」とあり、焼き立ての変わった肩衝についての意見を求めている。織部が肩衝を受納しており、周囲の評判もよい。

ここで、宇都窯の後半期の状況を振り返ってみたい。慶長11年4月14日付の書状<sup>(35)</sup>に、「度々焼せ候へ共、何も不出来仕、用二可立も無之候」とあり、肩衝を何度焼かせても出来が悪く用に立たない状況であった。一方、京衆からは出来の悪いものは不要であると度々告げられていたため、結局、義弘は送付を断念し、今後出来次第送ることとしている。続く5月1日付の書状<sup>(36)</sup>でも、「當分焼せ置候ハ悪敷御座候」という前書き付きで、しかし6個送るので「少成共用二可立様二被申候ハ、福嶋殿へ可被遣候」と随分な弱腰である。

出来栄を評価した京衆の筆頭は古田織部であったろう。慶長9年頃は評判が良かったにも関わらず、2年を経てもすっかり様変わりしている。茶入製作に苦戦する中で、織部好みの茶陶の産地であった

瀬戸への修業が意図されたのではなからうか。

先の7月25日付の書状を5年間の瀬戸修業を前提に見直すと、宇都窯からは大きく状況が変化している。新たに製作された茶入を織部が評価し受納したことは、義弘にとってこの上ない満足であったろう。また、焼き立ての変わった肩衝の試みも行われている。

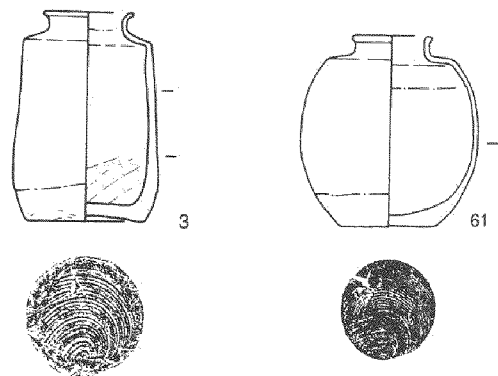
これまで述べたとおり、5年間の茶入の送付が行われない期間と茶入をとりまく状況の変化から、金海は実際に修業に出向いたと考えられ、宇都窯から御里窯への移行期に修業が行われ、その成果が発揮されたのは御里窯であったと考えられる。

また、焼き立ての変わった肩衝とは、これまでの薩摩肩衝とは異なる作風のものとして推測できる。これを金海の瀬戸修業の成果の一つとして捉えることは可能であろう。しかし、もう一つの可能性を示す興味深い記述がある。2ヶ月後の9月11日付の義弘から寺沢広高に宛てた書状の案文<sup>(37)</sup>に「追而焼物師之事、今度被差越爰元にて焼物仕、一段与見事ニ出来申、満足仕候、猶巨細者須磨七左衛門尉殿可有演説候」とあり、焼物師が義弘の元に来て焼物をつくり、一段と見事にできたとされている。つまり、御里窯に、おそらく薩摩とは異なる産地の焼物師が寺沢の計らいで来訪したのであり、その結果は満足のいくものだったのである。異なる産地の焼物師が製造したとなれば、作風が大きく異なるものができよう。寺沢及び須磨は唐津藩の藩主と士族であることから、織部も茶会で多用した<sup>(38)</sup>唐津焼の焼物師の可能性が考えられるが、唐津焼では茶入の製造は少なく、茶碗や花入などが主である。

ところで御里窯跡から出土した茶入は、大きく2つに分類されている<sup>(39)</sup>。接合作業を経て検出された155点の茶入片のなかでも肩衝が大部分を占め、製法の違いにより、円盤状の底部に胴部を積み上げた成形法で左回転の糸切痕のあるⅠ類と、ロクロ成形で右回転の糸切痕のあるⅡ類があり、全く異なる製法の両者が併存するという。

これまでⅠ類とⅡ類が併存する根拠としては、「織部好み」と「遠州好み」の特徴を表現した2種類として捉える試みがなされているのみである。しかし、ロクロ成形による右回転糸切製法をもつ瀬戸への金海の修業の成果、あるいは他地域の焼物師の来訪を前提とすれば、二種の技法が併存することは容易に理解できる。

ちなみに、先行する宇都窯では御里窯Ⅰ類と同種の茶入片が検出されており、また、御里窯より後出の藩窯（冷水窯跡）でも初期にはⅠ類が検出されて



Ⅰ類茶入実測図

Ⅱ類茶入実測図

関一之「御里窯跡出土の茶入」より転載（『大名茶の時代—薩摩と九州山口の茶陶』所収）

Ⅰ類	Ⅱ類
左回転の糸底 円盤状の底部に胴部を 積み上げ成形 内面へラ削り 器壁が厚い 歪な器形	右回転の糸底 ロクロ成形 器壁が薄い 均整のとれた器形  *関一之「御里窯出土 の茶入」をもとに作成

いる。一方、御里窯Ⅱ類は藩窯では検出されず、藩窯はその後、ロクロ成形による左回転糸切へと集約されていくという<sup>(40)</sup>。

しかしながら、現段階ではそのどちらかを特定することは困難なため、ここでは2つの可能性を提起するに留め、先に進みたい。

御里窯期の薩摩肩衝の評判は、慶長17年から翌18年がピークと考えられ、同18年9月24日付の山口直友書状<sup>(41)</sup>にその様子が活写されている。「爰元之衆ほしかられ申候事、中／＼此まへかとのやうなる御事にてハ無御座候、其段過御推量申候、貴老様御好よく御座候ゆへ、見事ニ出来申候とて、たゞ今ハ尚以方々より所望被申候」とある。これは、金海の瀬戸修業と前年の織部の指導による成果であろう。

慶長17年11月22日付の古田織部書状<sup>(42)</sup>からは、上田宗箇が織部の名代として薩摩に派遣され指導を行ったこと、しかし、宗箇が持ち帰った茶入に織部は満足せず、義弘が別途送った二つの肩衝に対する評価を具体的に記し指導を行ったことがわかる。その内容から、織部好みの薩摩茶入とは、背が高く大振り、筒状の器形に黒釉がたっぷりとかかり、所々に白釉が浮かぶ肩衝形と理解できる。この時、織部は二つの茶入のうち一つを受納している。

慶長17年といえば、随一の数寄者として駿府や江戸へ参向して将軍の茶の湯の稽古を行い、江戸と京都を奔走していた<sup>(43)</sup>とされる慶長15年から間もない、織部の名声がとりわけ高くなった時期である。

周囲から注目が集まる中、織部の評価は、彼をとりまく数寄者や幕府の重臣たちにはすばやく伝わり影響を及ぼしたようである。先に述べたとおり、翌年の薩摩肩衝の盛況ぶりは、山口直友が先の書状で記したとおり、“これまででない想像を越えるもの”として義弘に伝えたほどである。しかしながら、この指導の直前の10月11日付書状<sup>(44)</sup>によれば、義弘が送った11個の肩衝を、「何も不可然」として織部がすべて返却している。ここに織部の美意識に対する厳しさが見える。

御里窯時代は、藩外からの技術導入と織部による指導の結果、薩摩肩衝が宇都窯時代よりさらに大きくクローズアップされた時期と言える。とはいえ、織部自身が薩摩肩衝を茶会で使うことはなかったし、御里窯時代に茶会で用いられた事例はわずか2件にすぎなかった(表3)。

## おわりに

義弘の茶陶製作にとって、古田織部は欠くことの出来ない存在であった。そのため、慶長19(1614)年に織部が亡くなったのを機に、茶人を介した中央とのやりとりは途絶えている。このことから、宇都窯と御里窯は義弘の御庭窯といった性格のものであったと考えられる。薩摩肩衝がすべて贈呈されていることもそれを裏付ける。しかしながら、関ヶ原の戦い以降、未だ薩摩藩の行く末が不安定な時期に中央の人々に贈与された薩摩肩衝は、藩の外交戦略の一翼を担ったと言えよう。

一方、義弘にとって茶の湯は単なる外交ではない、深い愛好と本格的な探求の対象であったと筆者は考えている。70歳を超えた晩年に至り「弥数寄も不罷成躰候」となってもなお、「其元方々はなやかなる数寄可有御覧与御浦山敷存候」と、京都の茶の湯への関心は絶えることはなかったようである<sup>(45)</sup>。

義弘は、茶の湯を千利休から学び、茶陶を織部から学んだ。そして、晩年は茶人として生きていたといってもあながち誤りではないだろう。

## 註

- (1) 関一之「薩摩の茶入―御里窯跡出土品から―」(『野村美術館研究紀要』13 野村美術館 2004)
- (2) 上原兼善「大名茶の形成と島津氏」(『日本史研究』518 日本史研究会 2005.10)
- (3) 松村真希子「古薩摩焼茶入研究ノート」1・2(『陶説』581・584 日本陶器協会 2001.8・10), 同「島津家文書」にみる薩摩焼」(『東洋陶磁』35 東洋陶磁学会 2006)
- (4) 薩摩伝承館「大名茶の時代―薩摩と九州山形の茶陶」(美術出版社 2014)

- (5) 米原正義「戦国武将と茶の湯」(吉川弘文館 2014)
- (6) 「伊勢守心得吉」(『大日本古記録』所収)
- (7) 「上井覚兼日記」(『大日本古記録』所収)
- (8) 前掲註7 天正11年6月25日及び10月5日条
- (9) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』354, 464
- (10) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』471
- (11) 「宗湛日記」天正15年正月3日条(『茶道古典全集』6 淡交社 1958)
- (12) 陳舜臣「島井宗室」(『商魂』集英社 1984)
- (13) 『薩藩舊傳集』2に「惟新公は千利休より茶の湯御傳受被遊候」とある。
- (14) 「惟新様より利休江御尋之條書」は千利休編とされ、写本が鹿児島県立図書館に所蔵されている。
- (15) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』411
- (16) 「利休百会記」(『茶道古典全集』6 所収)  
本茶会記は写本が多くあり、実際の茶会の控えに基づくものか、利休風茶会の模範として作成されたものかについて議論がある。
- (17) 「一鶴首之御茶入之事」『三暁庵主談話』(新薩藩叢書刊行会編『新薩藩叢書』4 歴史図書社 1971)
- (18) 『秀吉の宇宙―黄金―そして茶の湯』(佐賀県立名護屋城博物館 2013)によれば、名護屋城に加え大名らの陣地にも茶室が設けられていた。
- (19) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』1440
- (20) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』1417
- (21) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』67
- (22) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』411
- (23) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』736
- (24) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』1655
- (25) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』1966
- (26) 市野千鶴子「古田織部茶書一」解題(『茶湯古典叢書』2 1976)
- (27) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』1966
- (28) 大橋康二『十の美 古唐津―肥前陶器のすべて―』図録(佐賀県立九州陶磁文化館 2008)
- (29) 始良市教育委員会「2.古帖佐燒宇都窯跡」(『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』2004)
- (30) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』106
- (31) 島津久峰筆記『白鷺洲』(芸苑叢書 1920)
- (32) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』190
- (33) 「星山家譜」(『薩陶製菟録』鹿児島県立図書館蔵 所収)
- (34) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』915
- (35) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』190
- (36) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』204
- (37) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』953
- (38) 藤原友子「茶会記にみる唐津焼」前掲註28
- (39) 加治木町教育委員会「御里窯跡」(『加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書』4 2003)
- (40) 前掲註1
- (41) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』1050
- (42) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』974
- (43) 前掲註26
- (44) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』960
- (45) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』971

(ふかみなと きょうこ 学芸課主任学芸専門員)